世代要因（異なる時代の生育環境）

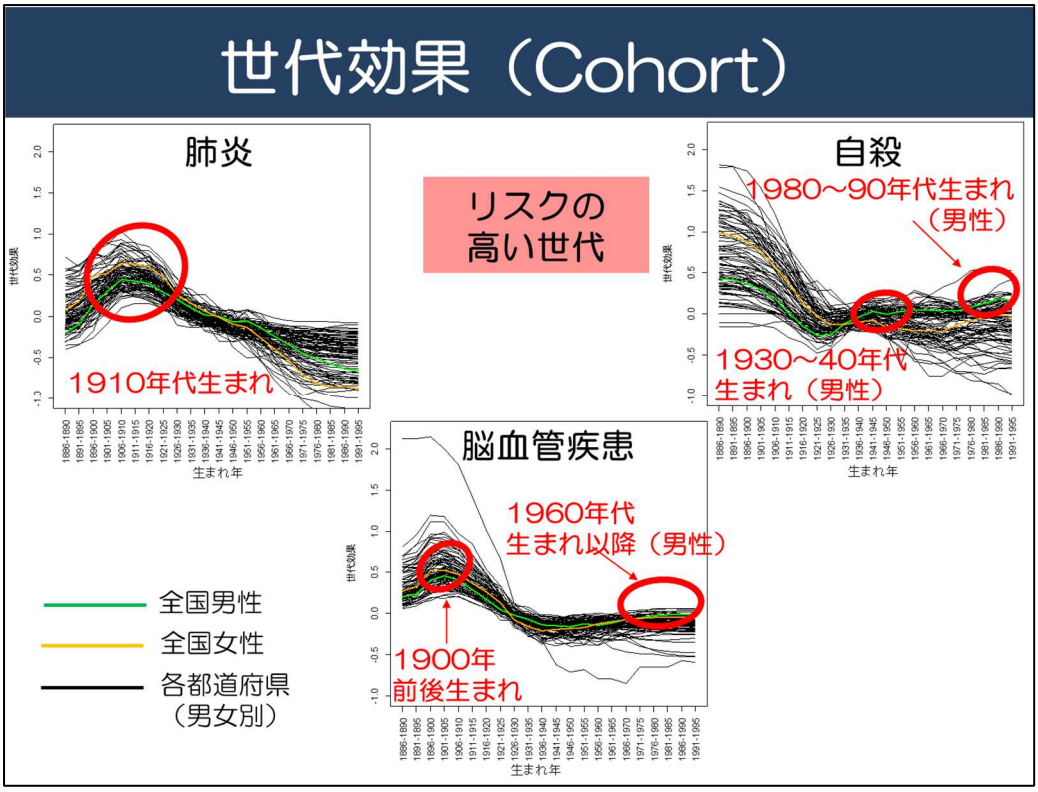
疾病動向は、生まれ育った生活環境やそれまで歩んできた時代背景により培われた、各世代（同時出生集団）が固有にもつリスクとその構成割合に応じて変動します。

（例：予防接種の施行時期、疾病を誘発・重症化する生活習慣など）

一般に、各世代の特性をみるときに「出生コウホート別の集計値」が用いられます。年齢要因や時代要因の存在は「出生コウホート曲線（図）」で確認できますが、複数の要因の影響が混交する場合の解釈は難しく、各影響の大きさを具体的に把握することも困難です。

＊本サイトでは、他の要因の影響を除いた各世代のリスク（世代効果）を提示します。

高リスク戦略のターゲットとして、リスクの高い世代を特定することができます。



全国（緑・橙）の結果からわかること

自殺では、1930～40 年代生まれ（昭和初期～戦中）と 1980～90 年代生まれ（いじめ自殺）の男性でリスクが高いことがわかります。脳血管疾患や肺炎では、1900～1910 年代生まれに比べて新しい世代になるにつれリスクが低くなっています。これは生育過程における保健医療対策や環境改善により、罹患や重症化を予防する特性（脳血管疾患は血管の脆弱性や生活習慣の改善、肺炎は自然免疫や感染予防行動等）を獲得してきたことが考えられます。但し 1960 年代生まれ以降の男性は、脳血管疾患のリスクが高まる方向にあります。

各都道府県・男女別（黒）の結果からわかること

いずれの死因も、新しい世代におけるパタンにバラツキが目立ちます。

＊詳しくは、メインページの上のプルダウンリストから選択してください。

① 選択した都道府県における世代効果をみたい・・・・・・・・・「世代効果」へ

② 類似の特徴をもつ都道府県を知りたい・・・・・・・・・・・・「地域特性」へ

③ 全都道府県でみたバラツキの程度を知りたい・・・・・・・・・「都道府県別格差と性別格差」へ

④ 特定の世代のリスクを全都道府県で比較したい・・・・・・・「リスクマップ」へ